

このような例はとくに脳底部近傍の病変の場には問題となり、病変の判読上大きなさまたげとなっている。

研究の目的は、断層シンチグラムが脳底部近傍の病変の診断にどのように役立つかを調べることである。

対照は脳底部近傍に病巣を有し、組織診断の得られたもので、腫瘍26例、非腫瘍2例である。使用した装置は大型シンチカメラ($15\frac{1}{4}$ インチNaI結晶付)に30°傾斜2300孔回転コリメータを装備したものである。断層像では陽性像の深度および拡りが3次元的に示され、また、正常集積像と病巣像との分離描写が多くの例で可能であった。これにより病巣か否かの鑑別に有用であり、診断精度の向上に役立つことが示された。

23. 小児における肺シンチグラムの経験例

○円尾 邦信 長瀬 勝也
(順天堂大 放)

平井 慶徳 田中 淳 倉繁 徹昭
阿部 正視
(同 小児外)

肺循環障害の診断には従来のX線診断に加えて、肺シンチグラムがしばしば用いられ、肺血流状態の観察には優れた方法として賞用されている。我々は乳幼児においてもしばしば肺シンチグラム診断を行っているが、最近片側肺の描出が不良であった数例について血管造影等と対比し報告した。今回は肺動脈閉鎖症、総肺静脈還流異常、肺動脈閉鎖および動脈管開存、先天性肺形成不全の4例について報告した。先天性肺形成不全以外は胸部平面写真のみで診断を確定することは困難で、血管造影を必要とするが肺シンチグラムは乳幼児でも比較的簡単に施行できるので、肺血流量を知る目安として血管造影に先んじて施行してみるべきである。

24. Trilute, Tetraluteによる甲状腺機能検査

木下 文雄 前川 全 中敷領勝士

(都立大久保病院 放)

岡本 二郎 七里 泰
(同 内)

Trilute, Tetraluteは $^{131}\text{I}-\text{T}_3$ レジン摂取率、血中 T_4 測定のためのKitであり、Triosorb, Tetrasorbに用いられる、resin sponge, Resomatに用いられるresin strip, Thyopacに用いられるsephadex顆粒の代わりにsephadex G-25のcolumnを利用したものであり、またTetraluteは強アルカリのcolumn内でTBPに結合した T_4 が離れるようになっている。

Trilute値はTriosorb値と $\gamma=+0.95$ とよく相関し、正常者と甲状腺機能亢進症との分離はよいが、正常者と甲状腺機能低下症との間にはかなりの重なり合いが見られた。

Tetralute値は正常者、甲常腺機能亢進症、甲状腺機能低下症との間のデータの重なり合いがほとんどなく、Tetrasorb, Resomat- T_4 , Thyopac-4とそれぞれ $\gamma=+0.95$ 前後でよく相関したが、他の T_4 測定による成績に比し、幾分低値を示す傾向が見られた。

Trilute, Tetralute法は、方法的に簡易で、短時間で済み、使用血清量もそれぞれ0.05ml, 0.1mlと少なく、臨床検査成績も優れていると思われた。

25. 副腎スキャンの臨床評価

—副腎手術症7例を中心に—

○町田 豊平 三木 誠 大石 幸彦
入倉 英雄 上田 正山 木戸 晃
南 武

(慈恵医大 泌)

原発性アルドステロン症2例、クッシング症候群3例、副腎性器症候群2例、合計7例の副腎スキャン像を手術所見と比較検討した。組織学的には、過形成2例、腺腫4例、癌1例である。副腎

の形態診断法としてほかに後腹膜気体撮影、副腎静脈撮影などと比較して、副腎スキャンは最も診断率が高かった (67%)。

像の鮮明度はレ線像がはるかに優れているが、腫瘍の局在診断、腺腫と過形成の鑑別などの点で従来にない特長的検査法と思われる。